

初年度活動報告を終えて

リハビリ看護センター フロンティア代表

理学療法士 齋藤秀和

平成 15 年 5 月 6 日開設から 16 年 8 月 5 日までの 15 ヶ月分のデータを集計、社会的通念や既存データとの比較により、地域性や傾向を探ってみた。フロンティアの 1 つの特徴としては、介護度 1 の利用者が多く、取引先のケアマネージャーの方々が、予防や維持的に訪問リハビリをプランに取り入れて頂けているようである。

実際に、脳卒中既往者維持期の機能改善や動作能力向上した例も経験しているが、それはごく一部でしかない。すべての利用者が抱える『加齢』に対し、我々が行っている在宅リハビリテーションサービスが、『予防』や『維持』に貢献できるか？どのような根拠により効果とするのか？客観的にどのようにケアマネージャーや利用者の方々にお伝えすれば良いか？自問の毎日である。

フロンティアの目標は、『利用者やご家族が望む在宅生活の継続』である。活動の場を在宅に移してから一層感じる事は、利用者の生活に対し、理学療法士や作業療法士が個々で行う機能改善を目的とした技術の無力さである。我々が在宅で出来る事は、唯一、評価（出来ないのか？やらないのか？等の専門的検査や判断のこと）や触れ合うことによる『きっかけ作り』である。また、在宅で医療職と関わる事により、利用者やそのご家族の『安心材料』となり、アドバイスや相談で何か道筋を作るための援助（生活のコディネート）が出来ればと思っている。

今後もフロンティアの在宅リハビリテーションサービスについて、現存の評価を用いながら、データを蓄積・検討を重ね、『フロンティア論』なるものを提唱できればと考えている。